

# 自閉スペクトラム症のインファンティア仮説

## 予備的検討

渡邊 登萌<sup>\*1</sup>・木谷 秀勝

Theory of Infantia for Autism Spectrum Disorder: A preliminary study

WATANABE Tomoe<sup>\*1</sup>, KIYA Hidekatsu

(Received August 5, 2019)

キーワード：自閉スペクトラム症 (ASD)、インファンティア仮説、語用障害、自己理解、主体

## はじめに

Rutter, M. によって、自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder ; 以下、ASD) が脳の先天的な障害であると認められてから約 50 年が経つ。しかし ASD の特性は、脳という目に見えない原因よりも、対人場面や何かに没頭している場面など、目に見える症状から理解されやすい。この症状からの理解は、個人のなかに障害を見出す医学モデルの形式を取りやすく、障害をもつ個人へ一方的に責任を求める支援になる傾向があった。したがって、個人と社会の間に障害を見出す社会モデルの視点から症状を捉えるべきであると指摘がなされてきた (熊谷, 2017)。

近年、症状を理解するにあたって、医学モデルでも社会モデルでもない視点が注目されている。それが、個々の人間の在り方全体を問う人格という視点である。精神医学において、ASD の発見は、これまでの統合失調症に代表される精神疾患という人間の在り方の「オルタナティブ」となる人格の登場であった (鈴木, 2008 ; 松本, 2018)。松本 (2018) は、「私は私である」という信念をもつことができるか否かが、精神疾患であるか否かのひとつの重要な指標となってきたとし、例えば「自己意識の希薄さ」(十一・神尾, 2001) がみられる ASD も、「私は私である」と信じるのが難しい状態であると述べる。このような ASD の人格を理解することの先には、近代以降の、ASD を含めた様々な人間の在り方の「ノーマライゼーション」がある (松本, 2018)。

ところで、人格に統合される以前の主体の段階から ASD という人間の在り方を描き出そうとしたのが、インファンティア仮説 (鈴木, 2008 ; 2018 ; 大東, 2009 ; 大井, 2010) である。この仮説は、ASD の中核症状のひとつである語用障害の根本に、ASD という人格を想定しつつ、彼らの言語活動を分析する。

現在、重要な ASD 支援のひとつに自己理解があるが、筆者は、インファンティア仮説が自己理解に人格という視点を導入する際の道標となるのではないかと考えている。そこで本論考は、言語活動から ASD 者の主体については人格を捉え直す見地としてインファンティア仮説を紹介するとともに、自己理解支援との関連を検討することを目的とする。

## 1. ASD と主体

本章の第一節では、インファンティア仮説を理解するにあたり踏まえておく必要のある主体という概念を、言語とのかかわりに焦点を当てながら確認する。第二節では、ASD の自己理解では、自己そのものではなく「自分らしさ」を理解する必要があることと、そのためには ASD の言語活動の在り様を踏まえた主体の在り方を理解する必要があることを論じる。

\* 1 山口大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専攻学校臨床心理学専修

## 1-1 言語活動と主体

インファンティア仮説が拠っているのは、主体は言語活動を行うからこそ生起するという立場である。「インファンティア」という語の出典となった、イタリアの美学・政治哲学者 Agamben, G. の著書『幼児期と歴史—経験の破壊と歴史の起源』（2001/2007）では、主体は次のように説明される。

主体の概念は、近代科学の誕生前後で異なっている。近代以前の世界観では、確実なものは「真理」として、また不確実なものは「経験」として、まさしく天と地に分かれていた。つまり「真理」は、占星術や神秘学が扱う叡知的な神智であり、「経験」の方は、受苦・受難によって得られる可感的な人智、すなわち共通感覚や判断力といったものとして存在していた。そして人間の主体は、後者の「経験」（人智）に基づく不確実なものであった。ところが近代になると、人々は自らの「経験」の不確実性を嫌うようになる。そこで「真理」と「経験」の分離を撤廃し、科学の主体として新しい主体を設定した。それこそが実体的で主観的な「意識」であり、デカルトのいう「エゴ・コーギト」である。新しい人間の主体は、「真理」に近づこうとして意識になった途端、「私は思考している」などとその心的内容を言語化する。すなわち言語化することで意識は現れ、「私」という主観は言語表現においてのみその姿を現し機能する。このことから、「意識とは言語活動の主体」に他ならないとみなされ、主体は言語活動のために生じるとされる。

## 1-2 自己理解と主体

ASD 者に対する自己理解支援は、社会適応を最終的な目標とし、ライフステージに応じて大きく2つのアプローチがある。一つ目は、思春期・青年期を中心に、「自分が何者であるか」という問いへの回答と、自尊心の育成・回復のため肯定的な自己像の形成とを目指す支援である。二つ目は、キャリア教育のために自分の特性を把握し、その特性との適切な付き合い方を探る就労支援に含まれる。共通して、意識的・主体的に自己の感情や性格、特性を捉えられるようになることが目指されている。これらの実践の具体的な効果として、二次障害の予防、ソーシャル・スキルやセルフ・アドボカシー・スキルの獲得、QOLの改善、他者理解、アイデンティティの確立などが挙げられている（滝吉・田中，2011；木谷，2014；小川，2018；平野，2018）。

多くの自己理解では、例えば「私は〇〇が好きである」、「私は〇〇が苦手である」という語りにおける「〇〇である」という後半部分の様々なバリエーションが、主語「私」すなわち自己に回収され、自己の輪郭が明確化されていく、という構造を想定している。けれども実際の自己理解支援では、文字通り自己を理解しようとしているのではなく、次に示すように、ASD 者がもつ特性を言語化する過程全体を通して、主体化が行われているといえるのではないだろうか。しかしながら、自己理解が自己よりも主体に着目していたとしてもなお、その支援の有効性については疑問が付される。

滝吉・田中（2011）によれば、これまでの自己理解は、「主体的自己」と「客体的自己」という2つから構成される「自己の二重性」に基づいてきた。ASD においては「客体的自己」に脆弱性があるゆえ、その強化・獲得が欠かせないが、そのときに着目されるのが主体性もしくは主観性である。この主体性は、「能動的そして創造的に行為を遂行する」（村上，2008）主体を意味する。そこで自己理解支援では、ASD 者の「客体的自己」を形成するために、彼らの過去の体験や特性を、彼らの主観的な価値基準に沿って意味づける作業が重要であるとされる（滝吉・田中，2011）。近年の傾向は、このような指摘と軌を一にしており、ASD 者自身の主体性・主観性を引き出し、彼らの語りに寄り添うことで、合理的配慮に沿った支援へつなげようと試みられている（平野，2018）。もっとも懸念されるのは、当事者自身による過去の意味づけと、支援者側からASD 者の多様性を抑圧する「説得的自己理解」（平野，2018）との線引きが非常に難しいことである。主体化には権力関係が反映されやすいという側面もあるため、慎重さが求められる。

他方、木谷（2014）は、自己理解とは、周囲の人たちとコミュニケーションを取りながら「自分らしさ」を発見していく体験であると定義する。支援の際は、（1）自分に適した方法で安心してコミュニケーションできること、（2）自分の特性を理解してもらい、また理解されない経験をしながら、（3）能動的なコミュニケーションが広がること、（4）最終的に新たな人間関係に還元されることが鍵となるという。その意義は、他者からの呼びかけに敬意をもって応答することで得られる、自分自身に変化する経験にあると考える（Butler，2005）。ゆえに自己理解支援では、主体化を促進させることではなく、周囲の他者や環境に応じてコミュニケーションを変化させる能力を育み、変化できる自分自身と、その変化に伴って他者や環境も変化していくことに能動的に気づいていく機会としての側面が強調されるべきである。ただし、ASD 者のみ

が変わるべきなのではなく、関係そのものを改善し更新していくため、コミュニケーションを交わす双方が変化していく必要のあることを忘れてはならない。

したがって支援において有効なのは、「自己の二重性」よりもむしろ、「話し手が『わたし』として自分を立てる能力」(Agamben, 2001)としての主体性である。言語化された「客体的自己」以前に「主体的自己」を探しても、そこに能動性・創造性をもつ主体や自己は存在しない。すなわち言語活動の後にあるいは言語活動そのものとして、その瞬間ごとの関係のなかに主体を捉える支援が肝要である。その主体こそは、「自分らしさ」ではないだろうか。裏を返せば、ASDのコミュニケーション障害すなわち語用障害の視点が、ASD者の言語活動、ひいては彼らの「自分らしさ」を理解する際に役立つと考えられる。

## 2. ASDと語用障害

ASDは、1943年に幼児期に発症する分裂病(現在の統合失調症)として、Kanner, L.によって発見された。言語に遅れのある症例を研究したカナリーが、ASD者は「コミュニケーションとしての言語を用いない」と報告した一方で、Asperger, H.は、言語に遅れないASD者の言語活動を、彼らの人格の表現として捉え、分析しようと試みていた(片桐, 2011; 小林, 2013)。1960年代後半、Rutter, M.らが、ASDは脳の先天的で器質的な障害であると発表し、言語-認知障害説を唱えた。その後、Wing, L.による社会性・コミュニケーション・想像性の障害という3つ組の定義が広まり、DSM-5によるASDの診断基準の一つも、「社会的コミュニケーションと対人的相互反応の持続的な欠陥」と定義されている(American Psychiatric Association, 2013/2014)。言語活動のもつ様々な側面のうち、伝達や他者との交流という目的に重きを置く潮流となっているが、今後、ASDの言語をどのように評価していくのが妥当であろうか。

ASDのコミュニケーション障害は、聴覚理解や発語の遅れなど前言語期より始まるが、成長に伴って語用障害が焦点となってくる(大井, 2010)。ASDの語用障害は実に多様で広範である。これまで多数の先行研究を検討してきた大井(2015)は、その様相を「発話交替, 話題維持, 聞き手注意確保, 前方照応, 言語行為適切性条件, 字義通り理解, 間接発話誤解, 命令態度, 丁寧さ調節, 明確化技能, 無応答, 含意見逃し, 重要情報後回し, 断言……, 結束誤り, 先行話題逆行, 不適切情報提供, 新旧情報区別, 過剰質問開始, 人称逆転(呼びかけ形式誤用), 単調音律, 身振りの乏しさ」にまとめている。これらの語用障害がもたらす誤解やトラブルは、疎外感を抱くきっかけになりやすく、ASDの社会適応を妨げている(大井, 2010)。

語用障害の背景としては、主に認知面から「心の理論」欠損仮説が注目されてきたが、脳のイメージング技術が向上した昨今では、脳神経科学からのアプローチが有力視されている。脳神経科学の立場を中心に、ASDのコミュニケーション障害の諸理論を検討した藤原(2010)によれば、トップダウンの情報処理過程が機能不全を起こしているとする中枢性統合理論、計画性や効率性の弱さを説明する実行機能弱化説、上記の2つの仮説を含む理論として、ASDと神経学的定型発達(Neuro-Typical; 以下、NT)の脳の物理的な構造の違いを指摘した低連結性仮説などがあり、また低連結性仮説を補完する理論として、共同注意の遅れ、模倣や共感の低下を説明するミラーニューロン障害説が提唱されてきた。

ところが、語用障害にも関連する認知機能の脳領域が散在している、語用障害はASDだけでなく認知症、失語症、右半球障害などにおいてもみられるなどの理由から、ASDのみに当てはまる「単一の認知機能障害」仮説を想定しにくいことがわかってきた(菊池, 2010; 大井, 2015)。近年は、脳の特定の部位に機能が存在するのではなく、部位同士を連絡するネットワークに機能が存在すると考え、特に「心の理論」や「心理的相互交流」などを支えるネットワークを社会脳と呼ぶ(藤原, 2010)。ASDの社会脳障害説は、ASDの社会性の障害を「複合的な社会的認知機能のネットワーク不全」(菊池, 2010)と捉え、ASDの様々な語用障害をも説明できるとして期待されている。

そこで、社会脳障害説にも適う新しい理論として注目されたのが、鈴木國文によって唱えられ、大東祥孝と大井学によって展開されたインファンティア仮説である(大井, 2010)。

## 3. インファンティア仮説 I

「インファンティア仮説」(あるいは「infantia 仮説」という名称は、2008年の鈴木氏の論考を指して、大井(2010; 2015; 2018)が用いたものである。けれども、鈴木氏の議論は2008年より一貫して、神経心理学よ

りもむしろ、ASD を統合失調症と比較する、哲学的な色の濃い精神病理学に立脚してきた。立場によってインファンティア仮説の内容は大きく異なるが、本論文では、インファンティアという概念を援用した立論すべてを「インファンティア仮説」と呼称することとする。この章では、鈴木による2つの論考を整理し、インファンティアという哲学の概念がいかに関 ASD を説明するのか確認する。

### 3-1 鈴木 (2008) によるインファンティア仮説

鈴木が 2008 年に初めて発表したインファンティア仮説は、ASD の語用障害を、赤子と同様に言語活動のない状態であると同時に、「ある欠如のために、たとえば模倣の過剰が起きているといった機制」をもつものとみなす。この状態を、インファンティアと呼ぶ。すなわち鈴木は、NT では、何らかの欠如を参照することが模倣につながり、この参照の契機が共同注意と強い関連をもっていると推論する。その一方で、ASD は、NT の模倣とは異なり、そもそも NT が参照している欠如を見つけられず、参照先を共有できないまま模倣を行う。それは、まるで Wittgenstein の自分だけにしか伝わらない「私的言語」を使用しているかのようである。その結果、例えば学術的表現に見られるように、言語の形式や表現は発達する一方で、語用論的な障害が生じると考察する。

この仮説は、語用障害にインファンティアという概念を援用した点で、大きくアガンベン (2001) に依っている。インファンティアとは、何も象徴せず何も指示しない言葉を語る経験、すなわちディスクール (意味) に到達することのないラング (記号) が存在する、という先験的な言語活動の経験を意味する (Agamben, 2001)。この概念の核心は、「真理」と「経験」との断裂に「有意味的な」あるいは「指示記号的な」関係を打ち立てることで、記号は意味を獲得できると考える点である。この「真理」は神智であり、「他者」や「現実」(村上, 2008) でもあるだろう。村上 (2008) は、他者の思考や心が未知であるにもかかわらず、他者とコミュニケーションしなければならぬ状況を「現実」という概念として抽出し、その「現実」は「認識や了解、対処ができない得体の知れない現象の切迫」であり、「非感性的な不測の事態」かつ「経験構造の秩序をはみ出す現象」であると論じた。「他者」は断裂の先にいる「現実」であり、経験できない「真理」の一側面である。村上 (2008) によれば ASD は、この「現実」の成立に困難を抱えている。

これまでラカン派の鈴木は、Lacan, J. と同年代を生きた Benjamin, W. に着目してきたが、上記の考察にもベンヤミンの言語と模倣に関する議論を援用している。ベンヤミン (1933) によれば、模倣には感性的類似と非感性的類似という2つのレベルがある。前者が、擬声語のような「意識的に覚知される類似に基づく『直接的な模倣』」であるのに対して、後者は、記号や文字に意味が対応するように「決定的にはなれたものに対応を見出す能力」を要する。すなわち、文字という記号という決定的に離れた両者に対応関係を結ぶ手段が、非感性的類似という模倣である。したがって、インファンティアとしての ASD とは、「真理」や「他者」、「現実」という非感性的な次元に気づかない、または気づきにくい状態のことである。

なお注意しなければならないのは、ASD 者は NT 者と異なる意味を、異なる経験様式で経験しているということである。NT では、記号やイメージが何かを代理し象徴することが意味となるが、ASD では「意味を持たないのではなく」、記号が模様となり模様という「感覚的な形こそが意味」となる (村上, 2008)。ASD 者は、NT 者とは異なる「真理」を志向しているのかもしれない。

### 3-2 鈴木 (2018) のインファンティア仮説

その10年後、鈴木は、通時性と共時性という時間性の側面から、二つ目のインファンティア仮説を発表する。この論考では、「真理」(非感性的な次元)と「経験」(感性的な次元)との間の対応関係を結ぶことに加え、人間社会における2つの時間の在り方である、通時態と共時態の間を移行することが意味となる。特に、共時態から通時態へ向かう飛躍こそが、言語活動となる。また、「経験」に対応する共時態の体系がラングであり、「真理」に対応する通時態に属するものがディスクールであるとする、インファンティアとしての ASD は、ディスクールの立ち上げに困難をもつ障害として描かれる。ただし、アガンベンによれば (2001) その対応関係は、結んでは解かれるものであるため、ASD であっても NT であっても、言語活動の度にインファンティアから出発して、再びインファンティアの状態に戻ってくるということとなる。

鈴木は、ASD のディスクールを次の4つに類型化している。

- ① パニック・妄想:通時的な (あるいは非感性的な) ものの次元と対応関係を結ぶことができ、ゆえにディスクールを立ち上げたものの、その関係を解くことができなくなっている。すると、ディスクールは通時

態において「宙吊り」になり、共時態に回収されないため記憶にならなくなってしまう。すなわち記憶として忘れられない過去が、現在と結びついた状態である。

- ② 自閉的呪術：通時的なものの次元に開かれておらず、有意味的な関係を打ち立てられない状態である。ラングのまま「共時態（象徴体系）に沈潜して」おり、経験や時間を共有できない。
- ③ 飛翔する論理：共時態から出発せずに、通時的な「確実性（真理）」を語ろうとするため、経験に基づかない非現実的な論理でも、躊躇いなく確信する状態である。つまりインファンティアに起源をもたない言語活動であるが、それが果たして可能なのか検討の余地がある。
- ④ 単一後の反復。

鈴木が描くインファンティアとしてのASDは、象徴的で非感性的な次元への接続や、共時性から通時性への連絡に困難を抱えている。ゆえに「真理」と「経験」の狭間で、もしくは通時態と共時態の狭間で、感性的な模倣を不合理に繰り返したり、忘れたり思い出したりという記憶との距離感に混乱したりしている。また村上（2008）によれば、人格は、「現実」における、他者という未知あるいは他者との断裂を覆うように定立するが、言語活動の主体も、「真理」と「経験」の断裂を架橋することで生起するものである。それゆえ、ASDはNTにとっての意味を確立させられずにいるし、主体以前に留まっているともいえる。このことは、主体性の発達のためには、能動的・創造的な行為の主体以前に、言語活動の主体から立ち上げる支援が必要であることを示唆している。

## 4. インファンティア仮説Ⅱ

以上のように、鈴木は哲学的な議論を行ってきたが、大東祥孝（2009）は、鈴木（2008）のインファンティア仮説を受けて、神経心理学の立場から独自のインファンティア仮説を考案した（大井，2010）。本章では、大東（2009）によって新たな展開を見せ、大井（2010；2018）によって検討が進められている、脳神経科学的なインファンティア仮説を紹介し、今後の課題を検討する。

### 4-1 大東（2009）・大井（2010）のインファンティア仮説

大東によるインファンティア仮説は、「意識化」の仕組みを説くニューロン群選択淘汰理論（Theory of Neural Group Selection；以下、TNGS）（Edelman, G. M.）が基盤となっている。

大東（2011）によれば、TNGSの想定する意識は二重に構造化されている。それが一次意識（primary consciousness）と高次意識（higher order consciousness）という二種の意識である。一次意識は、価値カテゴリー記憶と知覚カテゴリーシステムという両ニューロン群をつなぐ神経相互入力が基盤となって生じる意識で、「想起された現在」という特徴をもち、「出来事の表象と価値感情」を知覚する。高次意識は、一次意識の生じたニューロン群の間に、「意味論的能力」や「統語論的能力」が介在して再入力される神経活動が契機となって生じる。高次意識が機能するからこそ、われわれは過去・現在・未来、そして恒常性をもった自己の概念をもつことができる。

この考え方に従えば、ASDでは、一次意識は過剰に機能する一方で、高次意識に機能不全があるとみなすことができる（大井，2010）。詳細で生々しい「想起された現在」から構成されたASDの一次意識は、「世界をばらばらな原子論的事実群に還元してしまう」と考えられる（大井，2015）。それは同時に、彼らの豊かで傷つきやすい心の世界を作り上げていることとも共通している（木谷，2013）。ASDの言語は、個々のASD者の体験に応じて蓄積され、また独自の経験に基づいて体系化されているため、他者とは共有できない自分だけがわかる規則に則った言語を作り出していると仮定される。大東と大井は、このように「言語に基づく論理が社会性と分離された」ASD者の様子を、インファンティアと重ねたのである（大井，2010）。

### 4-2 哲学と科学の接続

鈴木（2018）は、自身の哲学的なインファンティア仮説に、科学の知見をどのように適用できるか、その「接続点」を探る必要があると述べている。大東（2009）・大井（2010）によるインファンティア仮説は、その第一歩である。しかしながら鈴木は、すべてを脳に帰属するか否かという点で、両インファンティア仮説には重大な違いがあるという（鈴木，2019）。

鈴木 (2005) は、言語活動の主体が生起するためには、人間の脳だけでなく、人間の脳の外に想定された「シニフィアンの体系」という「外なる臓器」との相互作用が必要であると主張した。しかし、TNGS では、意識は「すべからず相応の神経基盤を有する」と考えるため、「シニフィアンの体系」に対応するものが想定されていない (大東, 2011)。この「シニフィアンの体系」という「外なる臓器」の担っている機能は、無意識における「象徴的ななにかと現実的ななにかのこういう不可能な関係をつなぐ」機能と重なっている (鈴木, 2005 ; Dor, 1993)。換言すれば、非感性的な象徴界に、感性的な現実界における非感性的で経験できない経験を結びつける機能である。すなわち、鈴木が考えるインファンティアとは、「シニフィアンの体系」が機能する状態と同義である。

ところで、TNGS において自己の神経基盤は見つかっておらず、自己は非自明な「虚焦点」のようなものであると考えられている (大東, 2011)。ただし大東 (2011) は、可能性のある、神経心理学的な 2 つの自己の在り方を示している。一つ目が、高次意識の一側面であり、言語を媒介に生じる「内言意識」という意識である。二つ目に、日々の様々な体験ごとに生起する共時的な「体験の意識」が「自己の意識」にまとめあげられていくなかで、「歴史性をもった通時的 (diachronique) な自我意識」としての人格が分化していく、というアンリ・エーの理論を紹介している。このことから、鈴木と大東・大井の相違点が「シニフィアンの体系」の有無であるとするならば、両者の共通点は、近代的な意識としての主体ひいては人格や自己の成立には言語と時間という、少なくとも 2 つの要素が必要と考える点であることが窺える。

哲学と科学の接続は、インファンティアと科学の接続である。他方、インファンティアと実践の接続を試みたときに手掛かりになるのは、「現実」(村上, 2008) における他者とのコミュニケーションである。大井 (2010 ; 2015 ; 2018) は、ASD の語用障害のうち字義通り理解に焦点を当て、インファンティア仮説の妥当性を検討してきた。しかし、字義通り理解以外の語用障害にも、インファンティア仮説を支持する知見が潜んでいる可能性がある。そしてもし、ASD と NT がそれぞれ異なる「真理」すなわち「現実」を志向してディスカール (意味) を紡いでいるとしたら、同じ言語を使っているとしても、ASD と NT ではその言語から受け取るものが質的に異なる、あるいはその言語がもつ様々な側面の内、異なる側面に開かれていることになる。NT と ASD は、言語によって何を共有でき、またできないのか、明らかにしていく必要がある。

## 5. 自己理解とインファンティア

最後に、改めて ASD の自己理解支援の役割を再考し、自己理解にインファンティア仮説の視点を取り入れることの意義とその課題をまとめる。

### 5-1 自己理解支援の役割

以上のことから、自己理解支援は、「現実」における断裂に気づき、その断裂を埋める必要性を感じるような他者との出会いの場となるのが、一つの重要な役割になる。他者に言葉が伝わった感覚は、断裂を架橋できた感覚となり、この感覚を体験することで、ASD 者の社会性は変化していくのではないだろうか。

自己理解の役割は、さらにもう一つ考えられる。そもそもアガンベン (2001) は、インファンティアに端を発して、「真理」と「経験」の間あるいは通時態と共時態の間を移行することは、意味をもたらすだけでなく、「歴史」をもたらすと述べている。この「歴史」は、ヒトが人間的存在になり、人間的時間を生きている証拠となる概念である。ところが、アガンベン『身体の使用—脱構成的可能態の理論のために』(2014/2016) において、現代人は人間的存在になるための言語活動や時間経験を忘れてしまっているかのようなのである、と指摘した。ここには、インファンティアの経験を引き受けることができずに、主体性を失っているのは、ASD だけでなく NT も同様であることが示唆されている。つまり、アガンベンが問題視したインファンティアと言語活動の重要性は、次のように ASD の語用障害の文脈で読み替えることが可能であると考えられる。すなわち、ASD であるか否かにかかわらず、人々の言語は「歴史的生成のそれと確認できるなんらの意味も条件づけておらず、また時間のなんらの画期的分節化も条件づけていない」(Agamben, 2014) し、語用障害の有無にかかわらず、ディスカールを紡ぐことができているということである。この指摘に注目した國分 (2017) は、「コミュニケーションは過剰だが、言語は使われていないというのが現代社会の特徴で、そこで人間は、言語を通じて無意識を重厚に構成するのではなく、軽やかな記号だけを交わして生きている」と、熊谷との対談のなかで紹介した。つまり、他者と共有できるものだけが、人間を人間たらしめる「歴史」的な意味な

のではないし、物言わぬインファンティアは、語用障害や主体性、社会性の問題をもたらすだけではない。無意識という「私のものではない」経験の豊かさも、インファンティアを経て「歴史」を紡ぐことの効果なのである。本論考が、自己理解支援において主体化より言語化を強調する理由は、インファンティア仮説の観点が、このように言語のコミュニケーションや社会性の側面を重視することによって見えにくくなっている側面に光をあてるからであり、人間的存在というノーマライゼーションに直結する指標を参照することになるからである。

## 5-2 自己理解支援の課題

では、具体的にどのような言語活動を行えば、人間的時間を生き、人間的存在になるのだろうか。実は、このように問うことにはあまり意味がない。なぜなら、「歴史」を紡げたか否か、「真理」と有意味的な関係を結べたか否かの判断基準についてアガンベンは述べていない。むしろ、「語らないでおくことができる」という言語の潜勢力としてのインファンティアが軽視されていることへの危惧を訴える。また、多数派に価値づけられた「真理」との関係が意味であるとして、その他の関係が切り捨てられてしまう事態は避けなければならない。したがって、問いへの答えはNTにとってもASDにとっても同じで、語る内容が「歴史」を打ち立てたか否かよりも、語るという行為そのものを重視することである。すなわち、自己理解支援においては、「自分は何者であるか」を意味づけた内容が「自分らしさ」になるのではなく、他者に向けた言語活動が「自分らしさ」を実現するのである。その際、他者との出会いを設定し、他者との相互作用を形成するかが課題となる。他者との関係が築かれてこそ、能動的で創造的な行為の主体は立ち上がるだろう。

## おわりに

本論考では、ASDの自己理解支援で目標とされてきた主体性や主観性をインファンティア仮説の観点から捉え直し、自己理解支援において必要なのは、主体化よりも言語化とその表現を受け取る他者の存在であるとの結論を得た。

インファンティア仮説の立場からすると、語用障害の研究は、言語活動の特徴や障害を記述するだけにとどまらず、話者の主体に還元することが欠かせない。この観点は、主体性を要する自己理解支援に役立つ。自己理解支援において主体ひいては人格としてのASDに臨むことは、一方的な支援ではなく、双方向的で、互いに敬意をもった関係を築く一助になるであろう。

ASDの語用障害を理論化したインファンティア仮説では、主体なき先験的经验としての語用障害が、非感性的な模倣の機能不全、あるいは通時態への移行に困難を抱えるような時間経験と相まって、ASDの言語や主体ひいては人格を生み出すと考える。その状態は、他者への志向性が弱かったり、記憶との距離感や時間の枠組みを他者と共有できなかつたりするがゆえに、社会性が阻害されている状態と捉えることもできる。また、その原因は、ばらばらな一次意識の過剰と、一次意識を統合する高次意識の機能不全によって説明できるかもしれない。今後も、様々な角度からインファンティア仮説を検討することが望まれる。

すでにASD研究や支援の現場では、ASDは障害であるという捉え方から、ASDは特性であるという捉え方に移行しているが、それをASDは人格であるという捉え方にまで推し進めたとき、それでもなおASD者とNT者のコミュニケーションを妨げるものとして残るのは、どのような特性や語用障害なのであろうか。最終的には、このような問いを視野に入れて、今後の研究に取り組んでいきたい。

## 引用文献

- Agamben, G. (2001): *Infantia e storia. Distruzione dell'esperienza e origine della storia* Nuova edizione accresciuta: Torino, Einaudi. (上村忠男訳 (2007). 幼児期と歴史—経験の破壊と歴史の起源 岩波書店.)
- Agamben, G. (2014): *L'uso dei corpi* Vicenza, Neri Pozza Editore. (上村忠男訳 (2016). 身体の使用—脱構成的可能態の理論のために みすず書房.)
- American Psychiatric Association. (2013): *Diagnostic and statistical manual of mental disorders, Fifth Edition*. American Psychiatric Publishing. (日本精神神経学会監修 (2014). DSM-5 精神疾患

の診断・統計マニュアル 医学書院.)

- Benjamin, W. (1933): *Über das mimetische Vermögen*. (佐藤康彦訳 (1981). 模倣の能力について 言語と社会 ヴァルター・ベンヤミン著作集3 晶文社.)
- Butler, J. (2005): *Giving an Account of oneself*, Fordham University Press. (佐藤嘉幸・清水知子訳 (2008). 自分自身を説明することー倫理的暴力の批判 月曜社.)
- Dor, J. (1993): 無意識 Kaufmann, P. L'apport freudien: Éléments pour une encyclopédie de la psychanalyse, Bordas (佐々木孝次監訳 (1997). フロイト&ラカン事典 弘文堂.), 343-348.
- 藤原加奈江 (2010): 自閉症スペクトラムのコミュニケーション障害 音声言語医学, 51, 252-256.
- 平野郁子 (2018): 自閉症スペクトラム者が自己理解することの当事者の意義: 自己理解支援の課題と展望 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 132, 45-57.
- 片桐正善 (2011): 自閉症の定義における「社会」概念の変遷について: スペクトラム概念の可能性に照準して 応用社会学研究, 53, 171-186.
- 菊池哲平 (2010): 自閉症とソーシャルブレイン障害 熊本大学教育学部紀要, 59, 55-62.
- 木谷秀勝 (2013): 子どもの発達支援と心理アセスメント 自閉症スペクトラムの「心の世界」を理解する, 金子書房.
- 木谷秀勝 (2014): 自分の障害を理解する: 自己理解支援 臨床心理学, 14(1), 61-64.
- 小林勝年 (2013): 知能検査で認められたアスペルガー症候群の言語特性 鳥取大学教育研究論集, 3, 9-27.
- 熊谷晋一郎 (2017): 自閉スペクトラム症の社会モデル的な支援に向けた情報保障のデザイン: 当事者研究の視点から 保健医療科学, 66(5), 532-544.
- 熊谷晋一郎・國分功一郎 (2017): 来たるべき当事者研究: 当事者研究の未来と中動態の世界 臨床心理学, 9, 12-34.
- 松本卓也 (2018): 自閉症スペクトラムと〈この〉性. 鈴木國文・内海健・清水光恵編 発達障害の精神病理 I 星和書店 43-67.
- 村上靖彦 (2008): 自閉症の現象学 勁草書房.
- 小川勤 (2014): 発達障害学生のセルフ・アドボカシー・スキル育成に関する研究: 移行支援における自己理解と仕事理解 大学教育, 15, 25-35.
- 大東祥孝 (2009): Asperger 障害の神経心理学 - “Infantia” 仮説の検討 -, 日本言語聴覚学会第10回大会教育講演.
- 大東祥孝 (2011): 精神医学再考 神経心理学の立場から (神経心理学コレクション) 医学書院.
- 大井学 (2010): 高機能自閉症スペクトラム障害の語用障害と補償: 伝え合えない哀しみと共生の作法 子どもの心と脳の発達, 1(1), 19-32.
- 大井学 (2015): 隠喩, 皮肉, 間接依頼: 自閉症における言語の字義性について コミュニケーション障害学, 32, 1-10.
- 大井学 (2018): 語用と会話の問題 自閉スペクトラムの発達科学. 日本発達心理学会/藤野博・東條吉邦編, 新曜社, 137-147.
- 鈴木國文 (2005): トラウマと未来 精神医学における心的因果性 (精神科医からのメッセージ) 勉誠出版
- 鈴木國文 (2008): 広汎性発達障害概念が統合失調症の病理学にもたらしたもの: 「Infantia」概念を通して見る精神活動 臨床精神病理, 29(3), 305-317.
- 鈴木國文 (2018): 自閉症スペクトラム障害の思春期, 統合失調症の発症: インファンティアと言語活動. 鈴木國文・内海健・清水光恵編 発達障害の精神病理 I 星和書店, 191-214.
- 鈴木國文 (渡邊登萌宛私信 2019年5月19日)
- 滝吉美知香・田中真理 (2011): 自閉症スペクトラム障害者の自己に関する研究動向と課題 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60(1), 497-521.
- 十一元三・神尾陽子 (2001): 自閉症者の自己意識に関する研究 児童青年精神医学とその近接領域, 42(1), 1-9.